

〈研究ノート〉

東日本大震災 1年後と7年後の語りの記録

—「釜石調査」から知る震災で経験したこととその後の人生について—

竹村祥子*

要約

本稿は、東大社研の「危機対応学」プロジェクト「釜石調査」¹において、「東日本大震災」7年後に釜石の状況を「ヒアリング」した際にうかがった内容を中心にまとめたものである。筆者がヒアリングをした18名のうち15名は、同研究所のプロジェクト「震災の記憶オーラルヒストリー」（2013年非公開資料）の「ヒアリング対象者」でもあり、東日本大震災被災から1年後と7年後の2時点で、話をうかがうことができたことから以下の点が明らかになった。

本稿で記しておきたいことの第一点は、東日本大震災被災の経験やその1年後の実感は、7年たった「今」考えてみると、その時に考えていたこととは異なる評価ができると気づく。しかし同じ語り手が、いつまでも変わることなく心に残る「自分だけの思い」もあるということも2時点で話をうかがったことで明らかになってきた。

そしてもう一点記しておきたいことは、他の震災経験者（阪神淡路大震災）が語った「思い」が、東日本大震災のような他地域異時間の被災体験者であっても、同種の「思い」として想起されていることである。

キーワード 釜石調査 東日本大震災 オーラルヒストリー 希望学 危機対応学

目次

1. はじめに
2. 研究目的
3. 研究の背景と方法
4. 震災後 7年目の「ヒアリング」調査から
 - 4-1. 津波で大切な「物」を失って、思うようになったこと
 - 4-2. 仕事の変化や忙しさを乗り越えるとき思うこと
 - 4-3. 「震災にあわなかったら」という思いと仕事の変化、家族の変化
 - 4-4. 避難所運営にあたっていたころに考えていたことの再評価
 - 4-5. 生きている家族にとって「死亡診断書（死体検案書）」の意味は
5. 考察
6. おわりに

1. はじめに

本稿は、東大社研「震災の記憶 オーラルヒストリー」（2013年非公開資料）プロジェクトで「ヒアリング対象者」としてお話しいただいた方の中から、震災から7年たった時点で「現状」と震災後に変化した生活状況について再度お話しいただいたことの記録（データ）である。「危機対応学」の釜石調査でお聞きしたことは、1）前回のインタビュー後、今日までの仕事や生活等の変化、2）震災を経験したことで考え方が変わったと思うこと、3）最近の仕事や家族の状況について、4）最近の釜石市の状況について、である。

聞き取り調査を進めたことで、多くの人から語られた「釜石ならではの」「集合的記憶」については、2020年6月に出版された東大社研 中村尚史・玄田有史編『地域の危機・釜石の対応 多層化する構造』の12章「記憶の社会的チカラ」にまとめている。

本稿では、同じ聞き取り調査データから、東日本大震災被災の経験やその1年後の実感と7年たった「今」（調査当時）の被災経験についての評価の差異やそれぞれの経験に対する「思い」の変化について「語られたこと」を記し、被災時や被災1年後までの経験が、自分や家族の人生にとってどのような意味をもつと考えたか、7年たって、被災1年後には感じていたことが、その後変化したとすればどのようなことだったか、について記録し、考察する。

2. 研究目的

本稿の第1の目的は、震災から7年たって、被災当時の仕事や家族について、どのようにとらえなおされているか、筆者が、「危機対応学」の釜石調査で「ヒアリング」できた18名からお聞きした話を記録することにある。また第2の目的としては、個別の体験や「思い」として語られたことが、他の対象者と類似した「語り」であったり、他の地域でも同種の話が確認された場合、その体験や「思い」について記し、その意味を検討することにある。

3. 研究の背景と方法

東日本大震災1年後と7年後の聞き取り調査は、東大社研（東京大学社会科学研究所）の「震災の記憶」プロジェクトと「危機対応学」の聞き取り調査で行ったものである。

釜石市民を対象とした社会調査は、1958年東北大学社会学研究室の調査、その20年後1978年の中央大学の社会調査等をあげることができる²。近年では、東京大学社会科学研究所全所的プロジェクト研究をきっかけとした「釜石調査」が行われている。東京大学社会科学研究所による調査は、1度目は、2005年度から2009年度にかけて実施された（東大社研）全所的プロジェクト研究「希望の社会科学（希望学）」で行われた調査であり、2度目は、東日本大震災を契機として、2011年9月頃にスタートした「震災の記憶オーラルヒストリー」プロジェクトにおける釜石調査である。このプロジェクトでは、2012年度までに約60名の証言（未公開）が集められ、1000頁を超えるオーラルヒストリー集が編まれている。

3度目は、総合地域調査として、2016年度「危機対応の社会科学（危機対応学）」で実施された「釜石調査」である。

本稿では、2度目の釜石調査「震災の記憶オーラルヒストリー」のヒアリング対象者であった女性12名のうち7名に再度話をうかがうことができた。また今回初めて話をうかがった方には、「震災の記憶オーラルヒストリー」のヒアリング時に聞き手が共通でお聞きした質問内容³のうち、とくに、震災後1か月間の行動についても加えてうかがっている。

筆者は、「危機対応学」の釜石調査に参加し、3年間にわたり夏季と冬季年2回釜石市に数日滞在して対面で聞き取り調査を行っている。

筆者自身で行った聞き取り調査は、2017年8月23日～24日に3名、2018年2月17日～19日に4名、5月に1名（盛岡）、8月22日～25日に5名、2019年1月25日～27日に5名で、合計18名になった。調査場所は、釜石市役所会議室や釜石市内のホテルのロビー、市内公民館の一室などで、90分を区切りとして対面で話をうかがうことにした。

対象者に許可を得て、録音した内容は、文章化している。「震災の記憶 オーラルヒストリー」⁴でお話をしていただいた方15名も、「危機対応学」の調査で再度対象者としている。「危機対応学」の釜石調査でお聞きした内容は、次のことである。

- 1) 前回（「震災の記憶 オーラルヒストリー」プロジェクト調査）のインタビュー後、今日までの仕事や生活や家族の変化について
- 2) 震災を経験したことで考え方が変わったと思うことまたは変わらないと思うこと
- 3) 最近の仕事や家族の状況について
- 4) 最近の釜石市の状況についてどう感じているか

4. 震災後7年目の「ヒアリング」調査から

前項で示した経緯で、収集したデータ（話、エピソード）のうちから、本稿では、かけがえのない「物」に対する思いの変化について [4-1]、仕事の変化や家族の変化について、震災前には思いつかなかった解釈について [4-2] [4-3]、震災直後、避難所運営にあっていたころに考えていたこととその後経験したことを経て、評価の変わった体験について [4-4]、家族の死について [4-5]、まとめることができた。

4-1. 津波で大切な「物」を失って、思うようになったこと

震災後、自分たちの家が被災したことで、それまで大切にしていた日用品や本、CDビデオなどが流された。前回の調査ではその点には触れられなかったが、7年後の「危機対応学」の調査時点では、次のような話をされている。

(A氏)「前だったら欲しいものがいっぱいあって、買いたいなとか思うんですけど、一瞬にしてなくなっちゃうんだなあというので、物にこだわらなくなったというわけじゃないんですけど、そういうのはあるかもしれないですね。そのとき（前回調査時）も、もしかして何年かしたらまた戻るのかなと思ったりしましたが、あまりそれほど（考え方は以前のように

は戻らなかった)。今の生活に、例えばCDでもビデオ関係でも、ビデオってなんか恥ずかしいですけど(笑)、そういうのを集めていてなくなった瞬間に、「あーっ、どうしよう」と、生活の中で必要だったような気がしていたんですけど、実際なくなってみるとあまり見ないし、今はテレビの関係ですぐに再放送にもなるから、「必要ないのかなあ」とかいうのはありますけど。物欲というのはそんなに(なくなった。)(2017/8/23記録)

D氏も「物」についてのこだわりが変わってきたことを語っている。「どういう風に変ったか」という問いに対して、

(D氏)「財産だとか、そういうものに執着しなくなりました。例えば今までは、自分の好きなおいしい物は、後で食べるというそんな感覚があったのだけれども、今は先に食べてしまえという、そんな感じだよね。いつどうなるか分からないみたいな。」(2018/2/17記録)

津波に剥奪された大切なもの(大好きな音楽のCDアルバムであったり、高校生のころから集めて、やっと完結した漫画の単行本の全巻セットだったり様々ではあるが「かけがえのないもの」)を失って、被災後の生活の中で、「物」の再取得への思いが強くないことに気づき、語り手自身がそのことに驚いているという話である。

被災後、無くなってしまったかけがえのない大切な「物」について、かつてほどの執着を持たなくなった話は、他所で被災した大学生(被災当時は中学生)も話題にしている。

また失うかもしれない「物」を再取得することによって、震災前にあった日常を取り戻すという方法は選択されにくくなっている。

4-2. 仕事の変化や忙しさを乗り越えるときに思うこと

仕事上の昇進等によって職位が変わったり、配置転換によって役職や部署が変わるときに、震災が、職位や職場の配置転換のきっかけになったと感じた、ということが語られている。震災は、出会わなければよかった経験ではあるかもしれないが、ネガティブな評価ばかりが語られるわけではない。

(竹村)「やっぱり震災の疲れというか、そういうこともけっこう影響した感じがしますか。」

(B氏)「やっぱり、『震災なんて、なければよかった』って思いますね。『震災がなければこの仕事はなかったな』とか、ちょっとそう思ってしまうんです。『もっと余裕をもって仕事もできたし、家族のこともできたのに』と思います。どこも人手が足りない状態だったので、私の係の内でも十分とは言えないなかで、いっぱいいっぱいの仕事量があって、私も精一杯抱えていました。そのときに不調を訴える人が出てきたんです。あとは、めでたいことに産休に入る人も出てきました。他の人にこれ以上負担をかけるわけにいかないから、受け手がない仕事は私が抱えるということでやっているうちに、自分の心身が壊れたんです。病院に頼って、通院しながら薬をもらって乗り切りました。」

(竹村)「立場もありますよね。」

(B氏)「ストレスに弱くなりました。前回のときも『ストレスに弱くなった』と言いましたけれども、それ以上に、この2年間は心も体も弱くなったなと思いました。」

(竹村)「でも、仕事量も増えているんですね。」

(B氏)「それは今から思い出したくないくらいで、恐ろしいです。三鉄が復旧したので三鉄で通勤したんですが、朝7時前の一番列車で行って、最後の電車で帰りました。7時から9時(21時)までやって、それでも土日もあるくらいで、仕事の能力も落ちていたんですね。ちっとも頭が動かないんです。考えても、考えても……。」

(B氏)「父のことをずうっと悔やんでいるので、市役所を辞めて盛岡に行った友人に会ったとき、『悔やんでいるんだ』と吐き出したんです。彼女も父親を津波で亡くして、『行くな』と止めればよかったと悔やんでいるんです。どっちも母しか残っていないので、『母親に孝行することでよしとしませんか』と言われて、『そうだね』と。やっぱりそこに落ち付くんです。そしてお盆を迎えました。」

… 中略 …

(B氏)「『津波がなかったらどうだったろうな』と考えるんです。『これは津波がなければ、ないこと』というのはいっぱいあって、ちょっと僻みで思ってしまうことばかりです。彼女が盛岡に行ったのも津波のせいだし……。」

(B氏)「『震災が起きなければよかった』と思っていますけど、なければ会うことがなかった人たちに出会えているということはあります。人だったり、支援団体だったり、仕事の仕組みだったり。それはいまでも関係が続いていれば仕事にも活かしているし、そこは体験としてはよかった点ですね。」(2017/8/24記録)

震災がなかったとしても、仕事の職位(キャリア)が上がれば様々な変化は起こってくる。そのことはわかっているけど、「震災にあわなければ、このような(仕事をする)ことにならなかったかもしれない」という思いが湧いてくる。しかし「震災に会わなければ、よかったのに」という単純な否定とは違っている。「震災にあった」ことでそれまでの人生の延長線上では考えられない出会いの機会にもなっていることを指摘しており、それは否定的な評価ではない。

4-3. 「震災にあわなかったら」という思いと仕事の変化、家族の変化

C氏は、震災後、緊急対応期を超えた時期に、定年をまたないで、市役所を退職している。その時のいきさつと「思い」を次のように説明する。

(竹村)「少しだけ早く退職されたというのは震災の影響もあったのでしょうか。夫さんはそのことについて何かおっしゃっていますか。」

(C氏)「私が辞めたとき、夫が勤めていた民間会社が定年になる年だったんです。給料は下がるけれどそのまま勤めることもできたんですけど、そんなときに釜石(市)で土木の応援職員を募集していたんです。私がいなくても市役所は困らないけど、土木の職員はいたほうがいいだろうと思って、私は『もしかしたらあんたのほうが役に立つと思うから、チェンジしよう』と言ったんです。職員係のほうに言ったら、『試験を受けてくれれば願ってもない』と言われたので、いまは応援職員として私が辞めた年の4月から働いています。最初は3年

といていたんですけど、2年延長になって、今年度で終わりになります。もしかしたら県とかも延長になっているので、市もそうなるかもしれません。本人は『まだまだやることはあるし、働いてくれというのなら働く』とっています。」

… 中略 …

(C氏)「若い人も入ってきているから知らない人がいっぱいいます。いま、夫の職場も東京の土木技師の人が2人います。1年という人たちもいるけど、3か月とか半年で代わる人たちもいるので、歓送迎会が頻繁です。」

(C氏)「3か月で終わる仕事ってないから、結局は残っている人が大変なんです。うちの夫ももう5年目だから今は教える立場になったし、結局、残っている人が最後までやらなきゃならなくなっているの、そこはつらいですね。でも、土木の仕事を民間でもしてきているので……。」

(竹村)「応援ではなくて、もう中心ですよ。」

(C氏)「技術系の人たちが少ないし、若い人たちはまだ経験がないから、そういう人たちにいろいろ教えたりしています。」

(竹村)「なるほど。やっぱり震災の影響って大きいですね。」

(C氏)「大きいですね。本人も民間にいたときは山田とか大船渡とか、そっちのほうで仕事をしていて、震災後もそっちに通っていたんだけど、こういうことをしている場合じゃなくて釜石だっていっぱいあるのになと思ったみたいで、だったら市でやろうということになったんです。」

(竹村)「定年もきっかけにはなったけれども、応援職員ということで行かれたということですね。」

(C氏)「震災がなければそんなこともなかったろうし、…中略… たまたま自分たちは被災しなかったけども、家を流されたわけでも何でもなかったけど、でも、それを生で見えしまったから、本当のこと言って、何も流されてはいないけど、なんか自分が流された感じだったし……。」

(C氏)「個人的なことのほうが震災を境に変わってしまったと思います。」

…中略…

(C氏)「震災がなかったら、私はきっと途中で辞めないで最後まで勤めていたと思います。でも、体力に自信がなくなったし。あのときは、こんなのがまたすぐに来るような気配だったから、次に自分はもう同じことはできないなと思ったんです。そうするとみんなの足を引っ張るし、役に立たないのならどこかで区切りをつけなきゃなと、あのときは思っていました。」(2017/8/24記録)

C氏は、退職が、被災の影響を受けた結果と考えてもいるが、退職後の活動は、復興時期に培った仕事の経験を活かした展開を遂げたとも考えている。ボランティア活動や市の各種委員を務め、かつて市職員として市民にどのような協力をしてほしかったのかがわかっていることを活かして、現在は、市民として市役所にやってもらいたいことを説明しているとい

う。市と市民をつなぐ仕事として釜石市の各種委員を引き受けており、その「つなぐ役割」がC氏だからこそできることと認識されているようである。

4-4. 避難所運営にあたっていたころに考えていたことの再評価

(F氏)「この職業（市役所職員）をしていたらやはり自分の家族がどうこうとかいうよりも、先にそういうところ（避難所等）に（支援に）行かなければいけなかったり、連絡も取れなかったりということもあるだろうと思います。自分のことはそうだし、釜石に来てくれたすごくたくさんの方の応援の人たちをみて、『この人たちの家族は大丈夫なの』と逆に思うくらい（釜石に）いてくれて…、そこの価値観、家族が元気で自分が長期に空けても家族がなんともなく待っていてくれるという保障があって来ている人たちだけではない中で、長期で応援に来てくれているこの方々、心境はやはりもう被災地のためにという使命感がやはり先に立つからなのだと思うのです。」

(竹村)「家族はどっちにしてもサザエさんみたいに五十何年同じではないから。そこところはどうかされたかなと思って。」

(F氏)「でもやっと自分のことを考える気持ちになりつつあるというか、この仕事がやはりなんとなく私が、うちが被災しなくて家族が亡くならなかったということが、ずっと後ろめたいわけではないけれど、やはりだから頑張らなければいけないというのをずっと拭えなかったのですが、やっと去年くらいですかね。去年、今年に入ってまず、震災のことに関しての仕事はやったと自分で区切りを付けて、これにとらわれ過ぎないように。今までは仕事が一番だったのです。そこはでも、ちょっと変わりましたかね。」

(竹村)「べりっ、ぱきっと変わるのではなくて、ゆっくり、1枚ずつはがれるようにというか…?」

(F氏)「どうでしょうね。これから、ゆっくり。こういうふうに見える日が来るとまず思っていなかったのです。ずっとこの震災があったことによってここから離れられないとか、仕事を捨てはしませんが、そこがやはりとらわれているのが拭える日が来るとは思えなかったんですよね。これからゆっくり自分の人生を考えようと思います。後輩もできたので、あのときは、震災のときは私は下の方だったと思うのですが、それからやっと受け継ぐ後輩もできました。」

(竹村)「それは重要ですよ。それはやはり教えなければいけないという立場になると、相対化されるというか。」

(F氏)「…前略… それを託す後輩たちができて、教えるのは大変ですよ。難しいですよ、教えるのは。」

(F氏)「なんか本当にいろいろなことが起こったときに、この仕事をしていてできることはこういうことだったのだ、というのをまざまざと見せつけられたというか、自分はこの仕事にして良かったというか、この仕事にやっと納得したという感じがあると思います。」

なので、その点についてはいつこの仕事をやらなくなったとしても、この仕事でやりた

かったことはやり尽くしたという節目になった感じがします。」

(竹村)「それはいつごろから感じられるようになってこられましたか。」

(F氏)「本当にこの最近、去年ぐらいだと思います。やはりここに来てここからはもっと通常の全国の人たちがやっている同じ職種の業務が始まるのだと思ったときに、ここはプラスアルファで被災地でしかできないことをやったということで、多分一区切りついた感じがします。」

(F氏)「それではない今と違う道があったとしても、その先が幸せかどうか分からないし、震災前は思わなかったですが、震災の後に思うのは、日常がベースにあって、そこに楽しいことがあったり、悲しいことがあったりプラスアルファ、別に何かあるようなイメージで震災前は生きていたのです。今は毎日が非日常みたいなことで、非日常が積み重なって日常の何もない、今日みたいに穏やかで、何もないというのはすごく奇跡的なように感じるのです。それを気付かせてもらったというのはあの震災があって生きるか死ぬかとか、そういう瀬戸際の話をつい聞いていたり見たりしたから感じられるのだと思うのです。なんなのでしょうね。すごく一言では言えないのですよね。」

(F氏)「あの言葉（避難所に指定されていない場所で、避難されてきたお年寄りを看ていた時に、瓦礫を乗り越え山を歩いて避難所にきてくれた医師から「手を尽くしても、結果として誰かがこの避難所で亡くなったとしても、それは君のせいではない」と声をかけられた）は、絶対忘れられないです。いつでもあの場面がすぐ浮かびます。本当に自分もいっぱいいっぱいだったし、そこで言ってもらえたあの一言は、もし後輩をひとりだけ避難所に置いていかなければならなくなったら、きっと私も同じことを言っていくと思うのです。そのたったひとりで背負う責任の重圧につぶされそうになるのですよね、きっと、心境が。やはり、お医者さんはやはりみんなにとって特別な存在だけど1人に1人いるわけではないし。（それでも）お医者さんが来てくれるだけで、（避難している高齢者が）元気になるのとかも分かったので…。…後略…」

(F氏)「そうですね。「そうなのは君のせいではない」という。でも、いろいろな節目で家族がすごい大病をしたのですが、そのときとかも私は保健師なのにダメだ（何もできないかも）と思ったけれど、やはり先生の言葉を、そういうときも自分の心のどこかの支えにしているというか。不思議なものですよね。」

(F氏)「これ（ヒアリングの依頼）をいただいたときに、すみません、話の途中に。この震災があって、変化したこと、私もそうだし周りの人もそうだなと思ったのは、家族を急に亡くした人がすごくいっぱい出たではないですか。それを、震災までそういうことが例えばあったとしても、きっと（つらさを）言えない人たちの方が大半だったと思うのです。でも、堂々と、家族が亡くなったことが言える世の中になったということが、私はすごく変わったと思っているのです。」

(竹村)「それは、亡くしたという事実ではなくて、亡くしたということでこういうふうに思っているのだ、ということですか。」

(F氏)「両方ですね。多分、急に病気で亡くなっても自分から家族を亡くしてという話をしない美德ではないですが、田舎になればなるほど隠していたりとか。でも、そういうことを堂々と言って、自分がそれによってつらいということで相談に行ったりとか、病院に行ったりとか、精神科の敷居も下がったと思うし、それを本当にこういうことでもなければ、きっと精神科に行くなんてとてもこの辺では言えなかったことだろうし。」

(F氏)「そうですね。多分、職員のメンタルヘルスに力が入られるようになってきて、職員も言いやすい環境になっているし、精神的に疲れたからといって休めない。そういうことは病気ではないから診断書をもらうなんてということが、そうではなくてそれもやはり休むべきことなのだということが、良くも悪くもそれはいっぱい利用することもあるかもしれないけれど、でもそれは本当に言いにくかった人たちにとっては、すごく大きな転機なのだと思います。」(2018/2/19記録)

引用が長くなったが、特筆したいのは、震災後1年の時点では、物理的な被災が少なかった自分だからこそ、頑張らなければいけない、休んではいけない、被災された方を優先すべきだといった思いがつのついていたところから、7年たって、職場に後輩ができたときに、責任を一人で負わなくてもよいし、自分一人で頑張りすぎではいけない、ということが得心できるようになったという変化の実感が語られたことだ。それは、避難所に指定されていない場所で、保健師として支援の「手を尽くしても、結果として誰かが亡くなったとしても、当人が、手を尽くさなかった結果ではない」という具体的な困難状況をのりこえる支えとして受け止めていた被災1年後の思いを、7年を経て、後輩を支えることのできる言葉として伝えることができるものにリフレーミングしている点も注目したい変化ととらえることができる。

また仕事上で被災者の死を身近に知ることとなったとき、家族を亡くしたという事実と亡くしたことで重なるつらい家族側の思いは、秘めておく必要はなく、自分がつらいということを相談したり、医療機関を利用することで、つらさを緩和し、乗り越えていく手段にできるのだということが、市民に広まっていくことの効果を発見している点も着目できる変化ととらえられる。

4-5. 生きている家族にとって「死亡診断書（死体検案書）」の意味は

数年前の3月、母が亡くなった朝に、病院から、「死亡届」をもらった。その時、死亡届の右側に、「死亡診断書（死体検案書）」がついていることを知った。そこには、死亡の原因（ア）直接死因、（イ）（ア）の原因、（ウ）（イ）の原因、（エ）（ウ）の原因というように、死に至る原因を4原因まで記述できる欄があることがわかった。（ア）から（エ）の欄の横には、さらに「発病（発症）又は受傷から死亡までの期間」と記されている。

震災で亡くなって安置された家族の亡骸を弔うときには、この死亡届の右側の「死亡診断書（死体検案書）」という表記を見ることとなる。

(H氏)「私はうちの父の死亡検案書に、死亡までの時間みたいなのが書いてあって、「瞬時」

と書いてあったのです。それで、私はすごく、お父さんは優しくて弱い人だから、長い間本当に怖かったのだらうなと思っていて、助けられなかったなと思っていたので、大植のU先生に「うちのお父さんの死亡（体）検案書に瞬時と書いてあったのだけど、瞬時というのはどれくらいの時間？」と聞いたら、「まばたきする時間と書いて『瞬時』だよ。」と言われて。私がそれを気にしているのを先生は分かっているから、本当の一瞬だと（説明してくれた）。だから、怖いと思った時間は少ないのだよということを書いてくれて、そのときに救われたのです。すごく救われたと思って。それを不明とか3～4時間などと書かれたら、もう、ちょっと、というのがあって。

私の仕事上の上司は、お医者さんなのですが、震災のときも医療推進課の総括課長だった方なのです。その人に、私はそれで救われたのですという話をしたことがあって。そのときの書いてくださった方は支援にきてくださった先生なのですが、多分本当は、医者では不明が正しいというか、…中略…でも、死亡診断書とか死体検案書は家族に渡すものだから、家族にとって、もらいやすいようにというか、私のような人がいれば、多分、支援にきてくださった先生は全部の人に瞬時と書いているのです…。」(2018/5/24記録)

この話をきいたところに、矢守克也『アクションリサーチ・イン・アクション』第1章にある「阪神・淡路大震災 - 犠牲者はいつ亡くなったのか?」(p.12)の引用事例に出会った。「室崎益輝氏自身および研究室の学生が中心となって実施された」インタビュー調査によって、阪神・淡路大震災で亡くなった人の約9割の死亡時刻が震災発生時から数分の午前6時までの時刻が記され、死亡原因は家屋の倒壊という「定説」とは異なる話が明らかになってきたことを指摘している。この著書では、学生がインタビューで聴きとってきたことは、監察医が作成し、多くの「死亡診断書（死体検案書）」に書かれていた「即死」とは異なる、個別のケースのもつ意味の価値についてであるが、むしろ見逃せない知見は、亡くなった家族は、数時間は「生きていたはずだ」と考えている場合も、「苦しまずに亡くなったはずだ」と考えていた場合も、それぞれの思いをもって「死亡診断書（死体検案書）」を読み解こうとしており、その家族の最後の状況を知ろうとする営為を、学生たちが聞き取ってきたことにあると考える。H氏の話も同様の営為と想っていた。

闘病の末、病院で亡くなる場合、その死をみとる者がいる。臨終の床でどのようなことが起こっていたかを話してくれる人もいる。しかし被災して亡くなった人の多くについては、どのように亡くなったかは推測するしかない。生きている家族にとって、死んでいった家族の死により添い、みおくることはかなわない。

5. 考察

これまでの5つのエピソードに共通することは、「震災にあわなければ、このような剥奪や喪失感をもつことはなかったのではないか」と思う一方で、「震災にあった」ことでそれまでの人生の延長線上では交わることのない人と出会ったり、自身が、かけがえのない社会的役割を担える人生へと転換していることに気づいたという語りになっていることだ。被災

したことは、悲惨な出来事であることに違いはないが、その出来事をどのように自分の人生の文脈で受け止めるかは、複線的であることに気づかされる。さらにこのことは、被災1年後と7年後という時間の奥行があったからこそ知りえた知見であると考えられる。そして、人生は続く、また新たな転機を経て異なった文脈の語りなおしが可能になるかもしれない。

また家族の死に出会うということが、生きている家族にどのような意味をもたらすのかについても多くの示唆を得ることとなった。病院で亡くなったとしても、寄り添うことが許されない家族の死が出現していることは、コロナ禍といわれる災害のただ中にいるからこそ、今、個人や個々の家族の問題としてではなく、社会的にその対応について考え始めてよい時期にきていると本稿をまとめる中で思っていたようになった。

現在東京近郊の病院でも、高齢者家族の臨終のその死の枕辺に寄り添えないことが起こっている。病院内の感染を防ぐためであり、仕方がないことかもしれない。また地方都市に住んでいた親の臨終に、東京近郊からかけつけても、会葬に列席することは見合わせてほしいと、そっと頼まれたという話も聞いている。亡くなっていく家族を近くでみとり、別れることができないという状況は、東日本大震災やコロナ禍被災で起こった特別な非日常的事情ではないかもしれない。コロナ禍状況下で「顕在化した課題」なのかもしれない。

6. おわりに

複数の人から聞いた話であったが、確認がとれなかった「事実」もあった。それは、2011年3月12日か13日に、岩手県立釜石病院に、被災した乳幼児の沐浴と検診をすすめた医師（または看護師）がいて、動かすことのできた車で、避難していた乳幼児と母親をのせて、何回かのぞみ病院から岩手県立釜石病院まで連れて行き、乳幼児の何人かの沐浴と健康の確認がかなった、という話である。県立釜石病院側で、発案したといわれていた人に確認をとったところ、その方は、この出来事に直接かかわっていないことがわかった。

この出来事は、通常業務としてかかわっていた釜石市職員と岩手県立釜石病院の医師、看護師とのつながりが、緊急時に新たなつながりを紡ぎだすことになった査証になると予測して、聞き取り調査を始めたが、つながりの糸をたどっていくことはかなわなかった。この話については、再度調べたのち、次の機会に報告したいと思う。

註

- 1 危機対応学は、2016年度からの4年間を研究期間とする、東京大学社会科学研究所の全所的プロジェクトであり、正式名称は「危機対応の社会科学」である。本プロジェクトで行われた釜石市を対象とした総合地域調査を「釜石調査」と呼んでいる。

「危機対応学」の釜石調査に先だって、東京大学社会科学研究所では、2006～08年度希望学・釜石調査を行っている。また本稿で検討している「震災の記憶オーラルヒストリー」は2011年9月ころからオーラルヒストリーの手法を用いて震災時の記録を作成するプロジェクトの調査である。

経緯については、東大社研 中村尚史・玄田有史編 2020『地域の危機・釜石の対応 多層化する

る構造』「はしがき」に詳しい。

- 2 田野崎昭夫 2013 「『社会調査のあれこれ』釜石調査の40年」『社会と調査』10号 p.123
- 3 「震災の記憶オーラルヒストリー」のヒアリングでは、聞き手は、以下の項目を質問することを申し合わせて調査に臨んだ。
おかげで、テープ起こしをした冊子の中には、対象者自身や家族の震災後1か月間の行動や心情、(2012年ころの)「現在」の状況が記録されることとなった。
 - 1.) 震災後1か月間の行動を教えてください。
 - ・震災の発生時にどこで、何をされていましたか。
 - ・被災直後に、どのような気持ちで、いかなる行動をとられましたか。
 - ・被災後1か月間の生活では、何が大変でしたか。またその間、どのような問題が起きましたか。
 - 2.) 復興に向けての歩みを教えてください。
 - ・復興に向けて、あなた自身、一区切りついたなと思われる時期や出来事は、これまでにありましたか。もしそのような区切りがあった場合、その時期と出来事を教えてください。
 - 3.) 震災前、震災直後、現在にいたる変化について教えてください。
 - ・あなた自身の考え方や行動に変化が生じたと思いますか。もし変化したと思われる場合、その内容を教えてください。
 - ・震災後に釜石市民(家族、ご近所、職場の人々)の行動に変化が生じたと思いますか。もし変化したと思われる場合、その内容を教えてください。
- 4 「震災の記憶オーラルヒストリー」プロジェクトについては、東大社研 中村尚史・玄田有史編『〈持ち場〉の希望学 釜石と震災、もう一つの記録』にまとめられている。

引用・参考文献

- 東大社研 中村尚史・玄田有史編 2020 『地域の危機・釜石の対応 多層化する構造』東京大学出版会
- 東大社研 中村尚史・玄田有史編 2014 『〈持ち場〉の希望学 釜石と震災、もう一つの記録』東京大学出版会
- 田野崎昭夫 2013 「『社会調査のあれこれ』釜石調査の40年」『社会と調査』10号 p.123
- 矢守克也 2018 『アクションリサーチ・イン・アクション』新曜社

Summary

The documentary record of the talk about personal experiences of the Great East Japan Earthquake, one year later and seven years later
—About the life later by an earthquake disaster to know from “Kamaishi investigation” with what we experienced—

Sachiko Takemura

I compiled this report mainly on having asked them about the situation seven years after “the Great East Japan Earthquake” in “crisis response studies” project “Kamaishi investigation” of the institute of Social Science-Univ. of Tokyo. 15 of 18 people who did hearing are also “the people targeted for hearing” of the project “Memory oral history of the earthquake disaster” (2013 secrecy) of the same research institute.

What I want to write down in this report is, at the present seven years later, the thing that I could evaluate that was different from that when their experiences of the Great East Japan Earthquake Just after and the experiences one year later the thing they thought, having been thinking appeared just after the damage and one year later And it was confirmed that a memorable thing thinking “to feel only for oneself” was “the thought” that it was said by a person who experienced other earthquake disasters (the Great Hanshin-Awaji Earthquake).

Keywords the research on the Kamaishi region, Great East Japan Earthquake Disaster, Oral history, Social Sciences of Hope, Social Sciences of Crisis Thinking

(2020年10月8日受領)

